

中国残留日本人孤児から学んだこと(第4回)

## ポスト・コロニアルの中国社会をどう捉えるか

浅野慎一

※兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(兵庫県版)』

2018年3月号掲載記事に若干加筆しました。

戦後、中国に取り残された残留日本人(残留孤児・残留婦人)の人生は、まさに苦難の連続だった。

1945年に日本が敗戦した後も、中国では1949年まで国民党と共産党の内戦が打ち続いた。特に東北地方では、都市と農村の境に「卡子」という関所が設けられ、食糧が都市に入らず、膨大な都市住民が餓死した。

1949年に中華人民共和国が成立した後も、政治的混乱は続いた。

1957～58年の反右派闘争、及び、1958～60年の大躍進政策によって農業・工業は破壊された。1959年以降、3年間に及ぶ大飢饉で2000万人とも4500万人ともいわれる餓死者が生み出された。また1966年以降、10年間にわたる文化大革命によって、産業も教育も完全に破壊された。文化大革命による被害の全貌は、今なお明らかにされていない。

こうした戦後の中国の政治的混乱は、残留孤児を直撃した。多くの残留孤児は児童労働を余儀なくされ、一部は虐待されたり、「童養媳」として若年での結婚を強制された。「童養媳」とは、幼女の人身売買である。農村では不就学・貧困・非識字が蔓延していた。職業や居住地を選ぶ自由もなく、猫の目のように変転する国家政策に翻弄され、転職や地域移動を強制された。

しかも残留日本人は、「日本人」として理不尽な差別・迫害にも曝された。ほとんどの残留孤児は、子供時代から「小日本鬼子」と呼ばれ、いじめられた。進学や就職・昇進でも差別された。戦後の中国では共産党に入ることが昇進・出世の必要条件だったが、残留日本人は「日本のスパイ」の可能性があると決めつけられ、容易に入党を認められなかった。文化大革命では、多くの残留日本人が大衆集会で糾弾され、街中を引き回され、暴行を受け、強制労働や思想教育を強いられ、貧しい農村に追放された。残留孤児を育てた養父母、及び、残留日本人の配偶者や子供達も差別・迫害され、中には心身に深刻な障害を被った人達もいる。

ただし、ここで一つ、見逃してはならない事実がある。

それは、戦後の中国社会で、こうした苦難の人生を歩んできたのが、残留日本人

だけではなかったということだ。政治的混乱の下で児童労働や貧困、不就学や転職・地域移動を余儀なくされたのは、大多数の中国人民衆も同じである。「童養媳」として売買されたのもほとんどは、貧しい中国人の幼女達だった。進学や就職、入党で差別され、文化大革命で暴力に曝され、生命の危機に瀕したのも、残留日本人だけではない。むしろ被害者の圧倒的多数は、ごく普通の中国人民衆であった。膨大な中国人民衆が「黒五類」（地主、富農、反革命分子、破壊分子、右派）と決めつけられ、無実の罪で理不尽に迫害されたのだ。

そしてそうだからこそ、ともに迫害された残留日本人と中国人民衆は互いに助け合い、庇いあい、生命・生活を守り続けてきた。最も激しい迫害が繰り返された文化大革命の渦中でさえ、残留日本人と中国人民衆の間には、互いの命を守り合う密やかな連帯・協働があった。残留日本人の養父母や配偶者・子供達も差別・迫害をともに受けとめ、残留日本人を励まし、家族の結束を守り抜いた。その意味で残留日本人は中国人民衆と苦難を共有し、その渦中でともに学び、働き、助け合い、結婚して子供を生み育て、生き抜いてきたとも言える。

ときどき、「敗戦直後に日本に引き揚げてきた人々も、日本で苦労した」と語る人がいる。確かに、そうした人々も苦労した。でも、残留日本人の苦労はケタが違う。内政の混乱による死者数が千万人単位で推計される国は、戦後の世界でも希有と言わざるを得ない。

そして戦後の中国の政治的混乱を生み出したのは、東西冷戦である。特に戦後の日本政府はアメリカ従属路線をとり、中国を敵視した。1957年には、岸信介総理が台湾国民党の中国大陸反攻を支持する声明を出した。中国政府が反右派闘争や大躍進政策に舵を切っていくのは、その直後だ。残留孤児の、そして大多数の中国人民衆の苦難は、このような政治的背景の下で深まっていった。

中国を敵視し、東西冷戦に加担したのは、戦後・国民主権の日本政府である。中国の政治的混乱を招いたのは、戦後・民族解放後の中国政府だ。前回（第3回）の連載でも述べたが、戦後の民主主義（国民主権・民族解放）が生み出した新たな問題を問い直すまなざしを「ポスト・コロニアリズム」と呼ぶ。

残留孤児は、単なる「過去の戦争による被害者」ではない。戦後の民主主義（国民主権・民族解放）が生み出したポスト・コロニアルの世界の被害者だ。そして私たちが今もなおポスト・コロニアルの世界を乗り越えられていない以上、残留孤児の問題もまた解決されてはいないのである。